○８月は「青少年の非行・被害防止全国強調月間」・夏の「郷土に学び・育む青少年運動」（平成30年７月１日～８月３１日）　○人権に関する主な週間や記念日等　「人権同和問題啓発強調月間」

十島村教育委員会だより　平成 30 年７月号

むらやまかーカラ情報

南北１６０㎞　「心をつなぎ　気概に満ちた」十島の教育

十島村教育委員会
〒 892-0822 鹿児島市泉町 13 番 13 号
TEL　099-227-9771

７月・・・村教育研究大会

十島村教育長　有　村　孝　一

7月23日から24日の2日間の日程で、第43回村教育研究大会が開催されました。

本村に学制が発布されたのは昭和5年です。本村の教育の歴史は89年ということになります。それを考えますと、43回という数字はちょうどその半分近くになるということになります。

したがって、この研究大会は本村教育の歴史と言っても過言ではありません。諸先輩方が、これまで営々と築いてこられた教育実践に、改めて敬意を表するものです。何よりも一年に一度ではありますが、村に勤務する先生方が、日ごろの学習指導法や生徒指導などの教育実践について、時間をかけて2日間にわたって、じっくりと話し合いをすることが出来るというのが、本大会の良さです。そして協議を深めることで、2学期の教育実践に還元していただければと思います。

今年度から、この一週間を学校閉庁週間としまして、すべての先生方がこの会に参加しやすいようにしました。そのことは、私が十島村に就任して以来ずっと考えてきたことであります。そのために、村の議会で説明し、出張所長の協力をいただくなど、越えなければならないハードルがいくつかありましたが、やっと4年目にして実現の運びとなりました。本当にほっとしています。

また今年は、平成時代最後の村教研ということになりました。来年は、新しい元号で開催されます。何という元号になるかは分かりませんが、新たな村教研を探るいい機会ではないかと思います。

1日目は、小中別の部会から始まりました。ここでは、小学校は、県教育庁から講師の先生においでいただき、外国語科の指導について全体会で話し合いがなされました。中学校では、「特別の教科道徳」の新学習指導要領を中心に話し合いがなされました。

教科専門部会では、県総合教育センターや鹿児島教育事務所等から講師の先生方に来ていただき、直接指導を受けることが出来ました。

2日目は、今年から初めての試みとして、実践発表を二人の先生にしていただきました。諏訪之瀬島小学校の東山崎教諭は「極小規模校における体育指導」について、小宝島小中学校の田畑校長は、「村誌で学ぼう」という題で発表していただきました。これらの発表について学校ごとに話し合いがなされ、今後の参考になること請け合いです。

研究会は、最後に名山小の中野校長先生による講演で幕を閉じました。

台風等が発生して開催が危ぶまれましたが、当初の予定どおりに実施でき、無事に終了できてよかったです。

これからも、十島村の子どもたちの為に、持てる力を精一杯注いでいただきたいと思います。ＮＨＫの大河ドラマの「西郷どん」ではありませんが、先生方、「気張れ！　チェスト」と申し上げたいと思います。

「18歳成人」２０２２年4月1日施行予定！

既に、選挙権年齢は１８歳以上に引き下げられ、若者の政治参画が進んできています。

さらに、これまで２０歳が成人として様々な権利と義務が発生する年齢でしたが、２０２２年度から、１８歳を成人とする民法が施行されます。現在、飲酒やギャンブル、女性の結婚年齢引き上げなども話題になっているようです。

さて、成人というと成人式（十島村では「新成人を祝う会」）が一般的に開催されます。

２０２２年度は、「２０、１９、１８歳」の３学年が一緒に祝うことになると考えられます。現在の「中２～高１」の皆さんが対象です。

シリーズ――新聞に投稿１
（平成３０年７月３日南日本新聞「若い目」掲載）
平島中3年　野澤美玲

大人ってなんだろう

最近、周りの大人たちから「中学生は、まだ子供」と言われることがある。そんな時考えるのは、「大人ってなんだろう」ということだ。

ただ単に、一定の年齢を超えると大人になれるのか、それともその人の人間性やモラルのようなものでなっ大人として判断されるのか。大抵の人は 20 歳になったら大人」「高校生はもう大人」と年齢を境に判断しているような気がする。

私は、一人一人の人間を見て、大人かどうかを判断してほしい。それはきっと大人に対して憧れがある学生は大人に向かって人生を歩んでいる。そこには目標なそれの存在がいて、その人に近づくために自分に必要な物事を一生懸命こなしている。

世の中には、子供が思いもつかないレベルの考えを持った人がたくさんいる。逆に、人を傷つけたり、自分の子供をちゃんと育てられなかったりする人もいる。でもその人たちもみんな、社会では「大人」と呼ばれる。私はこれから、中身を見て「大人」と判断される世の中になるといいと思う。

シリーズ――新聞に投稿２
（平成３０年７月１５日南本新聞「若い目」掲載）
小宝島小4年　有馬　らん

先生試験がんばって、

試験のために、たん任の先生が鹿児島に行きました。残された私たちは、おるす番です。

その間、校長先生の授業です。めったにないことなので、何だか得した気がします。今回は、先生がプリントをたくさんじゅんびしてくれました。「プリントでの勉強もいいけど、校長先生の授業だけだといいな」と思いながら、プリントをしています。

先生がいないと、低学年の友だちとの遊びがうまくいきません。「先生、早く帰ってきてね」と思います。

でも、大切な試験に向けてがんばってほしいとも思います。

シリーズ――新聞に投稿３
（平成３０年６月１２日「若い目」南日本新聞掲載）
諏訪之瀬島中2年　金森七海

交流学習で学んだ

内容は、中学生が私たち鹿児島に住んでいる中学生と一緒に学習することです。

私は、前の日に諏訪之瀬島の中学生と交流することになったとき、「嫌だな」と思ったのです。「楽しい気持ち」が一番強かったのです。

「船が出ずに、延泊」になったとき、「一緒に過ごせる」と思ったのです。

「中学生は、進学で、高校に進学することによって、中学校では、中学生と仲良くなれたのです。

「高校では、高校生と友達になれたのです。

「この二つのことから生かしていきたい。

シリーズ――新聞に投稿４
（平成３０年６月２２日「ひろば」南日本新聞掲載）
諏訪之瀬島小5年　日高　凛風

他島の友達と交流

5月の終わりに、十島村の5、6年生合同の修学旅行がありました。修学旅行で一番心に残っているのは、他の島の友達と交流ができたことです。

最初ぼくは、自分からしゃべることができませんでした。でも他の島の友達が気軽に話しかけてくれました。おかげで、こっちからも話しかけやすくなりました。

お互いのしゅ味の話をしていると、自分と似ているところがあることに気づきました。そのうちに分からないところを教え合うこともできるようになりました。そして、いつの間にか自分のなやみを話すようになり、信らい関係を築くことができました。それからぼくは、みんなが笑顔になるように面白いことを言ったり、一日のふり返りをいっしょに話し合ったりしました。

今回の修学旅行で、他の島の人たちと交流することで、心から優しくなれたと思います。ぼくは、2学期から転校します。新しい学校でも、今回の経験を生かしてたくさん友達をつくりたいです。

海外派遣ホームスティ事業 in Australia

下記の５名の児童生徒が派遣されます。

①口之島　小６年「村上詩織」　8/13 ～ 8/23
②中之島　高２「平泉開翔」　8/10 ～ 8/23
③諏訪之瀬島　中２「金森七海」8/10 ～ 8/23
④悪石島　中２「西えほん」　8/10 ～ 8/23
⑤小宝島　高２「上三垣理恵」　8/10 ～ 8/23

はばたけ　十島っ子！

意義深い「村長と語る会」

主婦　上川淑子

２日付本紙に「十島中学生、村長と論戦」の見出しで、十島村の中学生 23 人が役場を訪れ、合同交流学習の一環として「村長と語る会」が開催されたという記事が掲載されました。素晴らしい試みだと思いました。

生徒の皆さんは議場に入るのはきっと初めてだったでしょう。この場所で議員たちが村のことをいろいろ議論しているのだろうと、胸をドキドキさせながら入場したと思います。それぞれの住んでいる島の実態を調べてきた生徒たちの質問は、どれも内容の深いもので、肥後正司村長も「よく観察している。村政に生かしていく」と述べていました。

ふるさとは生涯心に残るものです。年を重ねるほどに思いは深まります。島の中学生は、卒業するとふるさとを離れます。

子供のころから自分の住んでいる地域に関心を持っていれば、ふるさとへ帰ってきて住みよい島づくりに尽くすでしょう。そんな人が増えるといいと思います。

今後も村長と「青年と語る会」「女性と語る会」などが開かれると、島民の思いが行政へ反映され、それぞれに特徴ある７島がさらに住みよい場所になるのではないでしょうか。（鹿児島市）

中之島小・中学校からのメッセージ

教諭　川畑勝巳

中学校からの交流研修で，中之島小学校に勤務して２年が経つ。毎日が私自身の勉強であり発見であり，様々なことに気づかされる。特に，小学生の学習や運動に対する興味関心の高さと，一生懸命さには感心させられる。

また，教科担任制ではない小学校では，子どもたちと学校生活の多くの時間を過ごす。そこでは学年に応じた学びの質や深さ，年齢に伴い変化していく学びの姿を間近に見ることができ，一人一人が違う多様な学び方をし，その学びを楽しんでいるように感じる。

子どもたちは，中学生になると高校進学に向けた「受験」という大きな壁が立ちはだかる。勉強という重圧に加えて，思春期特有の心の揺れや葛藤に悩まされる生徒も多い。

そしてその壁を楽しんで乗り越えられる感覚を身につけるためには，自身の努力と何より教師の力量が欠かせない。

島立ちの日までの残りの時間の中で，教師として今，何ができるか。小学校段階から，大きな希望と自信をもたせられる子どもたちを育てていきたい。